

現地通信

ドンキレク—南タイの回教部落—

矢野 暢

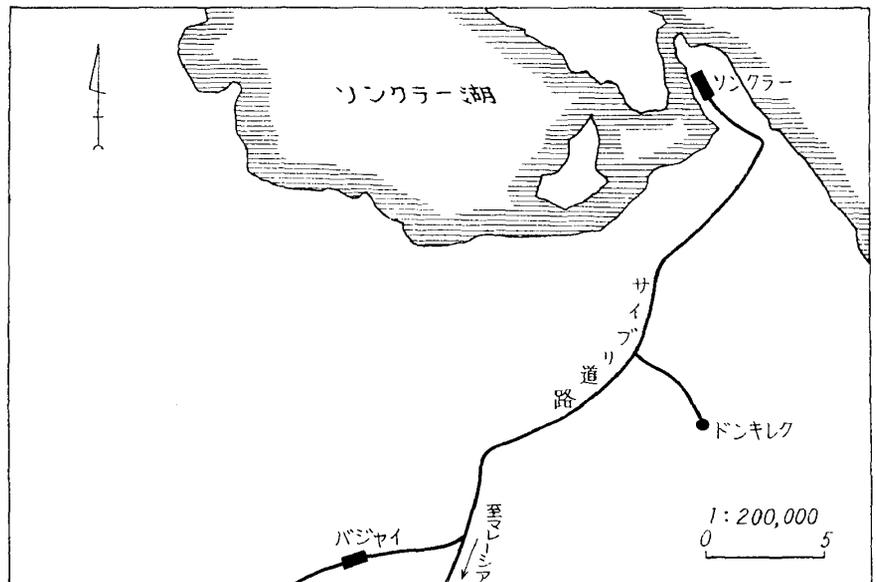
(一)

タイの南部の行政上の中心と見做されているソクラー県は、マレー半島の東海岸のちょうど中ごろに位置している。県庁所在地のソクラーの町は、人口3万余りの小さな町であるが、地形に恵まれた漁港をもち、近隣諸県の漁業の集産地として栄えてきた。港から少し離れて、遠浅の海岸がある。人っ気の少ない美しい砂浜は、この町の名所になっている。町の中央に盛り上がった燈台のある丘からの展望も、その海岸に劣らず、素晴らしい。このソクラーの町を起点に、1本の舗装道路が西に走り、やがて弧を描いて南に折れ、マレーシアに抜けている。ソクラーからマレーシアの国境まで100キロもない。この道路は、マレーシアにあるアロールスターという町の別名をとって、サイブリ道路と呼ばれている。

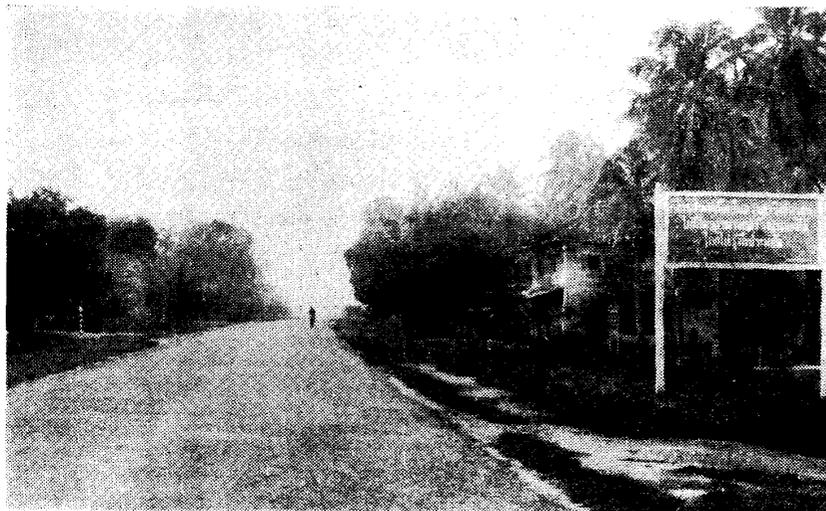
ソクラー県の南に、更に3つの県が連なっており、その先がマレーシアである。タイ人は、ソクラーの南にあるたとえばパタニ県などのことを語るとき、まるで我が家に居候している遠縁のもの話題に触れるようになかば他人行儀に話しをする。理由ははっきりしている。第一、パタニやヤラーでは、主としてマレー語が話され、タイ語が通じないからだ。第二に、そこらに行くと、仏教徒はまばらになり、白い回教寺院がやたらとめだつからでもある。いわば、その地域は、タイの版図の中でありながら、文化的にはもはやタイではなくなってい

る。お隣りのマレーシアの文化圏が国境をこえて、割り込んでいるのである。

話をサイブリ道路にもどそう。二つのバスが辛うじてすれ違える程度のそう広くない道路だが、舗装はすばらしくいい。黒っぽい道が、緑のゴムの樹林のあいだをくねって走っている風景は、ちょっとしたエキゾティシズムを感じさせる。そのゴムの樹林のあいだから、時折およそ4、5米の蛇が這って出て、車にひかれるのも、この地方ならではの光景である。車にひかれた蛇は、誰も触れたがらないので、その場に置き去りになる。次の日には、もうひらく長々とのされてしまっている。車の往きかいは、かなり頻繁なのである。このサイブリ道路の両側には、路上を走る車のきらびやかな近代性と対照的な、まるでひなびた部落がたくさんある。しかし、あるいはゴム園にさえぎられ、あるいは椰子の樹海に埋もれていて、そういう部



ドンキレク部落所在略図



朝まだきのサイブリ道路には、まだ車の影は見えない。この地点から、左に折れて4キロのところ、ドンキレクがある。右に折れると、村市場があり、毎週火曜日に村中の部落から人が群れ集う。

落は、ほとんど道路の上からはかきまみることができない。もしかきまみることができたとする、熱帯風な家屋にかこまれた、回教のマサジットが見えるはずである。

サイブリ道路の両側には、仏教部落にまじってかなりの回教部落がある。ところが、ソクラーを突き抜けるこの道路ぞいの回教部落は、ソクラー以南の居候のような回教徒の社会と少し違っている。なぜならば、ここの回教徒は、日常会話語に、マレイ語ではなくて、ふつうのタイ人なみに、南部方言を話すからだ。タイのことを少しでも知っている人は、「マイペンライ」という言葉を聞いて知っているはずである。この慣用句は、タイ人の国民性を表象するとまでいわれ、タイ語の代表みみたいな言葉である。ところが、この言葉が、南タイの田舎では通じないから面白い。南部方言では、「マイプルー」という、風変わりな表現で同じ意味を表わしている。ソクラーの農民は、その言葉を、プルーに独特のアクセントをつけて、元気よく発音する。こういう南部方言を喋る回教徒のことを、土地では「タイ・ケーキ」と呼んでいる。「ケーキ」とは、本来マレイ人ないしインド人をさす特別な言葉だが、南では「ケーキ」というと、もっぱらマレイ人のことであり、同時に回教徒のことでもある。「タイ・ケーキ」とは、マレイの宗教をもったタイ人、という意味である。学者は、これを直訳して、「タイ・イスラム」と呼び、タイの文化をもった回教

徒、という意味を持たせている。土地の呼び方よりもやはり「タイ・イスラム」と呼ぶほうがいいようだ。なぜならば、ここいらの回教徒は、人種的背景は、タイ人ではないからである。南タイをぶらぶら旅行していると、たくさんの回教徒に出会うことができる。仏教徒は、タイ人らしい野暮な容貌をしているのにたいし、回教徒の顔には、どこことなくタイばなれした趣きがある。ソクラーの町の魚市場に、朝の5時半ごろたたずんでいると、朝もやをわけて、小舟が幾種類もの魚を運んで、市場の岸壁に漕ぎ寄せてくる光景を楽しむことができる。そのたくさん

の小舟が、仏教の漁村から来たのか、回教の漁村から来たのか、漕ぎ手の顔や身なりだけで見わけるのは、そう難しいゲームではない。このゲームに一朝興ずると、存外、回教徒が多いのに驚かされる。ちょっと調べてみると、ソクラー県の全人口の2割近くはタイ・イスラムなのだ。タイ・イスラムは、ソクラー県以北にも探すことができる。ソクラーには大きな湖がある。土地の人は「タレサップ」と呼んで自慢にしているが、船で2日かかりで湖上航海を試みると、思いも掛けぬ美しい風景に出遇すことがあり、実に楽しい。ところが、この湖を北に半日も遡行するとソクラー県のもう一つ北のパタルン県に入ってしまう。パタルン県に入ったあとでも、船の上から、白い回教寺院を遠望できるはずである。「タレサップ」に面したパークパユンという町のミナレットは、ことの他うつくしい。このように、タイ・イスラムは、ソクラー県の独占物ではない。しかし、やはり、マレイ文化圏に直接接しているソクラー地方のタイ・イスラムが、数も多い上に、もっとも典型的なサンプルを提供してくれるように思われる。

(二)

ソクラーの町からサイブリ道路を西に約14キロ余り走ると、左に折れる道がある。道にはわかには悪くなるが、東北タイなどと土質が違い砂が多いので、雨が降ってもそう困ることはない。したたるような緑には

さまれた凸凹の道を南に4キロ行ったところに、きたらしい高床式の建物が乱雑にかたまりあっている1つの集落がある。道の左脇には、ミナレットもない野暮なマサジットがあり、この集落があまり富裕でない回教部落であることがすぐわかる。マサジットのもう1つ左に、ひときわきたない家があり、その床下のにんびりした風貌の中年の男が腕枕をして寝そべっている。そのまわりを家鴨やがちょうや鶏がせわしげに歩きまわっている。その中年の男に名前をきいてみよう。すると、かれは、面倒臭そうに起きあがり、「俺の名はアーマッドで、この部落のプーヤイバーン（部落長）だ」と、ぼそぼそというだろう。アーマッドというタイ語ばなれした名前とプーヤイバーンという生粋のタイ語との取り合わせが面白い。かれに、かさねて奥さんの名前をきくと、「俺には妻は2人いる」と、いい捨てる、のそのそと立ち去ってしまう。このうす汚ない回教部落の名は、ドンキレクという。ドンキレクとは、キレクのある高台という意味である。キレクとは、ある種の鉱物をいうともいい、ある種の木の名であるともいう。

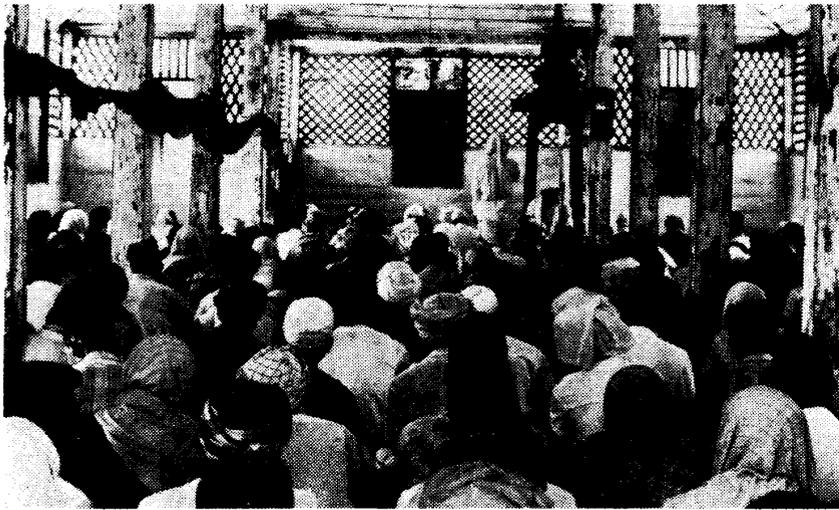
ソクラール県全体でいくつの回教徒の部落（ムバーン）があるか、人にきいてみると、ある人は170あるといい、別の人は140あるという。回教部落といっても、仏教徒がまじって住んでいる部落もあるわけで、純粋な回教部落は140もないかもしれない。ドンキレクは、その点、1軒も仏教徒を含まない純粋の回教部落である。部落長のアーマッドに、初対面の折、部落の戸数をきいたら、284戸あるといった。はじめ私はこれを信じた。しかし、調べてみてわかったことだが、実際は304軒ある。アーマッドの頭には数年前の統計が鍋の底のすすのようにつびりついているのだ。アーマッドの家には、部落の統計を示す書類のようなものはない。第一、あったら不思議である。タイの農村には、びっくりするほど紙切れが見当たらない。チェンマイの農村を1年間調査したあるアメリカ人の学者は、かれの村で新聞紙を見たのは、前後2回きりであった、と、のちに報告している。ドンキレクも似たようなもので、かりに病人に薬をわけてやろうとして、紙切れを出せ、と命ずると、それがない。アーマッドの家に部厚い統計表が積んであったら、いわば奇蹟である。そういう統計表を求めようと思ったら、プーヤイバーンより一段上の位のカムナン（村長）の家に

行かねばならない。ドンキレク部落は、ソクラール県パウォン村に属する。パウォン村のカムナンは、この土地の大ボスである。かれの家には確かに村の戸別リストがあった。部落毎に厚くとじてあった。ところが、これも、つかいものにはならなかった。なぜなら、はじめの20枚余りとおわりの10数枚がひきちぎれていて、どこかに失せていたからだ。マレイ人みたいな顔付きをしていばかりかっているカムナンに、そのことを告げると、標準語で「マイペンライ」といった。しかし、そのアクセントには南部訛りが強かった。カムナンやプーヤイバーンが、このルーズさで村を支配しているとしたら、村民は、これに輪をかけてのにんびりしているのだな、と思え、愉快になった。

304戸というと、かなり大きな部落だといえよう。304という数字は、私の心にとって、かなりの負担となった。ふつう、人類学者が、一年間の調査のために村落を選ぶばあい、200戸以下の村を選ぶとされてい



ソクラールの回教徒の老人。かれの顔が示すように、タイ・イスラムは人種的にふつうのタイ人とは別の血筋に属するようだ。この老人は、若い頃メッカに行ったという。メッカ旅行の思い出の記憶は、いまでも確かである。



ドンキレクの金曜日の礼拝。男達は、皆思い思いの恰好をしているが、頭を布でおおい、清潔なシャツとパトウンをはき、そして事前に水浴びして身体を清めている点では皆一様である。

る。しかし、私は、ドンキレクを調査村に選ぶことに、それほどちゅうちょは覚えなかった。私が、最初、ドンキレクに関心を寄せた主たる理由の一つは、周囲を仏教部落に囲まれて孤立しているという事実であった。ドンキレクが4つの仏教部落に囲まれている配置は、異質社会の接触という観点から、ひじょうに魅力に富んでいた。そして、ドンキレクは、もう一つ魅力を持っている。ドンキレクにはじめてはいって行くと、マサジットとアーマッドの家のある、ごちゃごちゃした集落に行きつくわけだが、はじめは、うっかり、これがドンキレクのすべてだと思ってしまう。ところが、ここには、全体の3分の1余りが寄り集まっているだけで、残りの200軒は4つの集落にわかれて、遠く離れて散らばっているのである。つまり、ドンキレクは、5つの集落からできあがっているわけだ。家々の集落のことを、タイ語では「クルム」という。ドンキレクの5つのクルムはそれぞれ、冗長で記憶しにくい名前をもっている。私は、自分の日記などには、各クルムに勝手にあだ名をつけて、それで記録することになっている。一番小さいクルムには、家は16軒しかない。このクルムは部落の一番南にあり、

もっとも開けてない環境にある。私は、このクルムを伊賀部落と呼んでいる。マサジットやアーマッドの家がある中央のごちゃごちゃした集落は、江戸部落と呼んでいる。伊賀部落と江戸部落とは、距離で1キロも離れていないのに、住民の民度や生活様式その他に、ひどい差があるのは面白い。要するに、ドンキレクが5つのクルムをもち、しかも、クルムがそれぞれ特性を備えていて、各クルム間に共通点と相異点とがあるという事実は、ドンキレクというごく狭い社会のなかで、はや比較研究ができることを意味し、それが私を少なからず喜ばせたのだった。

(三)

私は、サイブリ道路からドンキレクへの道が別れ折れる地点に、1軒家を借りて住んでいる。そして、ほとんど毎日、早朝ドンキレクに入り、夕暮の祈禱がおわる頃まで、ドンキレクの住民とまじわっている。数ヶ月前のことが思い出される。私がドンキレク調査をはじめて数日もたたないうちに、1人の老人が「バタヤク」で死んだ。そのとき、私は、心臓麻痺で死のうがポックリ病で死のうが、要するに急死のばあいには、「バタヤク」という言葉が用いられることを知った。これはじつは、破傷風を意味する。しかし、その



数ヶ月前のある金曜日、家の引越しがあった。礼拝姿の男衆たちがこぞって家を担ぐのを手伝った。

老人の死は明らかに心臓病によるものだった。私は、幸運にも、老人を死が襲った直後にその家に来あわせたので、死体の傍に坐り込むことができた。私は、生まれてはじめてイスラムの葬式を目撃した。本の筋書き通りに、文字通りイスラム式に、死体は親類縁者の肩に担がれて、墓地に運ばれ、埋葬され、またたくまに、葬式はおわった。その日、私は、ドンキレクの住民のなかに、かなり融け込むことに成功した。これに続いて、もう一つの幸運が私を待っていた。老人の死の数日後、あるクルムから別のクルムへ、家の引越しがおこなわれた。ドンキレクでは、家の引越しは、文字通り、家ごとかついで、別の場所に運んで行く作業を意味する。住民の集団作業の典型的な事例であるといえようが、毎年見られるわけではない。引越しは、金曜日におこなわれた。回教部落である以上、ドンキレクでは、金曜日の正午過ぎに、集団礼拝がなされ、江戸部落のマサジットに、部落中の男衆が集まってくる。私は、毎金曜日の昼下がり、マサジットの入口に立って、かれらの祈禱の一部始終を観察する。回教徒の礼拝には、世俗ばなれした音楽性と没我の演技があり、みるだに美しい光景であると思う。ドンキレクでは、礼拝のまえに、「プラチュム」という時間がもたれ、部落民への伝達事項が、アーマッドないし

トイマム（導師）のおごそかな声で、男衆に読み上げられる。「プラチュム」とは、会議、の意味である。その日のプラチュムでは、トイマムが、家の引越しの希望があるから、礼拝後全員担ぎに行くように、と男衆に命じた。礼拝がすむと、男衆たちは、礼拝用の清潔な衣裳のまま、引越しの現場に赴いた。そこから家を担ぎ、約1キロ離れた地点まで運んで行った。家は、ゆっくりゆっくり動いて行った。私も、かれらにまじり、家を担ぐ仲間に加わった。150人程で押さえても、1軒の家は、私の肩に喰い入るように重かった。しかし、その1キロの長い道程のあいだに、私は、ドンキレクの住民と、より深く融和することに成功したのだった。

私の調査は、このような幸運からはじまった。そして、ドンキレクは、いつしか、私にとってすばらしいラボラトリーになった。

現在、ドンキレクは田植が完了したところで、いま西瓜植えの最中である。ソクラー地方は、まだ雨季が終らない。毎日の雨と、目前に迫った断食月とが、ドンキレクの住民をせわしく仕事に駆りたてている。かれらのせわしい動きは、私をも忙しくすることはいうまでもない。それがまた、楽しい。

(12月27日・ソクラー県パウオン村にて)

タイ・カセツェート大学から

福井捷朗

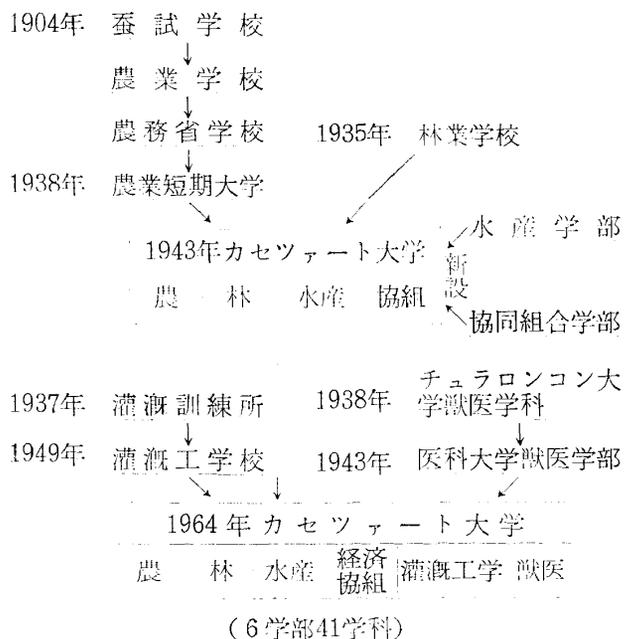
現在タイ国には7つの大学がある。すなわち、唯一の総合大学であるチュラロンコン大学、農、法、医、芸術の4つの単科大学、それに昨年発足したばかりのチェンマイ、コンケンの二地方大学である。これらは全て国立大学で、私立大学設立の噂は聞いているが、まだ実現は大分先のことのように見える。

「カセツェート」というのはタイ語で「農業」という意味で、したがって、「農科大学」というのが翻訳名になる。その略史を第1図にまとめてみた。現在タイの大学はすべて首相直下の「Office of Prime Minister」の下にあるが、たとえばカセツェート大

学の場合には、1962年までは農務省の管轄内にあった。現在直接には、大学は大学管理委員会によって管理されているが、その委員の顔触れは首相を議長、学長を副議長とし、6人の学部長、事務局長、それにこの委員会の推せんによって国王が任命する委員など合計30名からなっている。

カセツェート大学は図に見られる通り、現在6学部、41学科からなる。各学部の学科編成は省略するが、その特徴は、たとえば農学部には生物、化学科や、英語学科があったり、灌漑工学部に数学科があったりすることである。しかし、これらは来年度からあら

カセツェート大学（農科大学）略史図



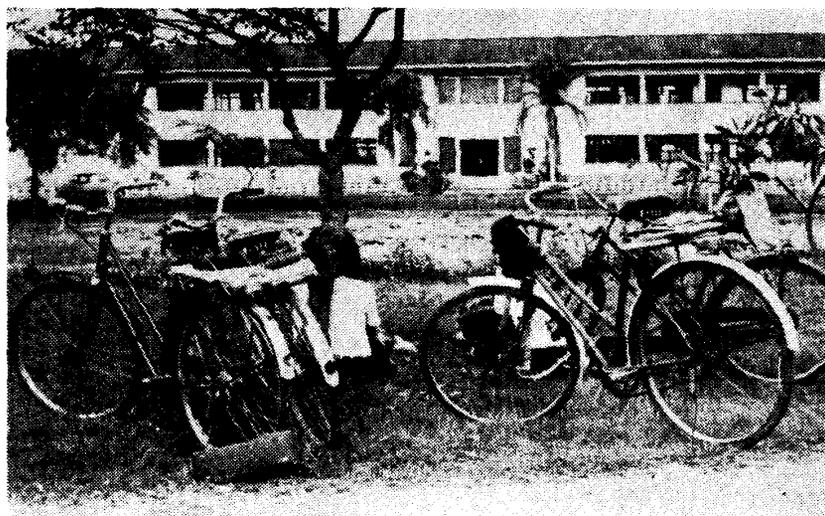
カセツェート大学本館

たに増設される予定の文理学部に移り、また将来は、現在の「経済学協同組合学部」を「経済経営学部」に、灌漑工学部を工学部に改めることなどにより、単科大学から総合大学へと発展して行くようだ。

普通タイの大学は4年制が原則であるが、カセツェート大学は一年多く、5年制の大学となっている。大学院は最近発足したばかりで、マスターコースだけが農業経済学科、農学科、畜産学科しか設けられていない。

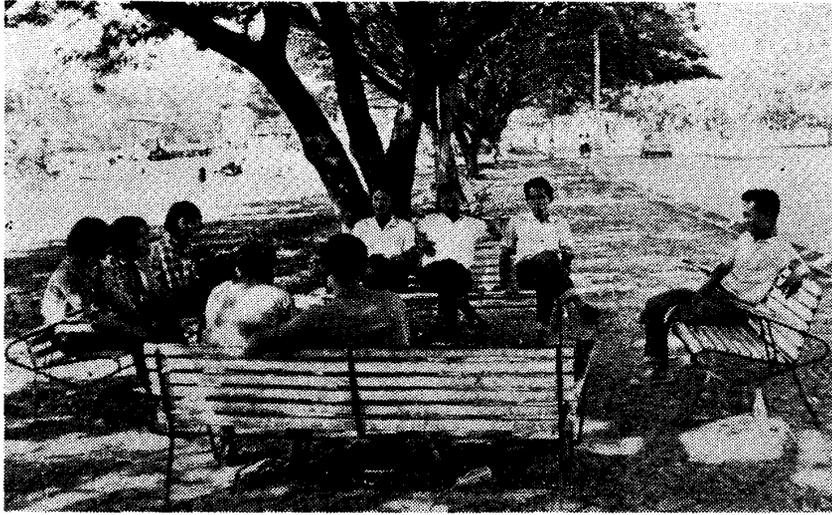
バンコック市の北方郊外にあるドンムアン空港から

市内へ車で入る途中、最初の左への曲り角から左手に用水路をへだてて長く続く生垣がカセツェート大学のメインキャンパスである。面積560エーカー、広々とした緑の多い公園のような構内に点在する涼しそうな建物、正門にそびえる寺院風の本部構堂、立派な学生寮などがあり、京大のバンコク・オフィスのある下町よりは幾分涼しく、風向きを加減で時々流れてくる畜産学部の畜舎の悪臭を除けば、バンコクでは比較的住みやすいところだろう。



カセツェート大学農学科

ここは Bangkok Dark Heary Clay といわれる、粘土含量が多く、小石を拾おうにも見当たらないといった低地水田地帯にあり、雨期には道路と建物の内部以外は水につかってしまうところだ。在学生数2,393名、(うち男1,783名、女610名)。その大部分がこのキャンパス内の寮に住み、また教官住宅もかなりキャンパス内にある。大学のキャンパスはこの他に、獣医学部、灌漑工学部が別にある。それ以外に、試験農場が3カ所、水産訓練所が1カ所、演習林が3カ所、それぞれタイ



カセツェート大学構内

国の各地に散在している。

大学の制度自体はアメリカの大学に近いものであると思われる。すなわち講座制がない。ただ教官組織はイギリス式であって、正教授といわれる教官は10人、Visiting Professorが7人、そのほか助手まで含めて、Staff teacherといわれているのが全部で378名（うち男290名、女83名）である。これらの教官は大きく二つに分れる。つまり管理、運営を主とするものと、教育、研究を主とするものとである。だから学生にたいする指導は生活のあらゆる面にまでかなり徹底しており、学生達は試験に追われているようである。しかし、逆に教官は、一人当たりの時間数、学生数が多く、研究活動は設備、財政問題とも重なって、随分制限されてしまっているようである。

大学の財政は国家予算として1964年度に210万バーツ、日本の金でおよそ4億円、演習林からの収入が約6千万円、そのほかに会社、個人の寄金がある。これら直接の財源とは別に、カセツェート大学は米国のオレゴン州立大学、ハワイ大学とそれぞれ交流があり、ロックフェラー財団の援助も受け、出張教授、機器、図書などの援助、留学生のひきうけなどがかなり行なわれている。なおアメリカ平和部隊の活動の一部として、現在2人の若いアメリカ人が英語教師としてここで働いてい

る。先にも触れたが、1962年まではこの大学は農務省に属していたという事実からも、わかるとおり現在でも農務省との関係は深く、米穀局の技術部などの建物が大学のキャンパス内にあり、その職員が講師になったり、学生達の卒業論文作成のための指導教官になったり、ときには実験室を提供したりして協力している。

大学入学試験は国家試験として、国家教育委員会によって一斉に行なわれ、その4～5倍という競争率の中からえられた学生達がそれぞれ

の志望にしたがって各大学にふりあてられる。暑期明けの6月中旬に新学期が始まり、途月10月から11月にかけて1ヶ月の休暇をはさみ、翌年3月に学年度の終りとなる。

はじめの1、2、3年が教養学部に対応するわけだが、高等学校のレベルが低いためあって語学をはじめかなり基礎的なことから始めているようだ。たとえば、筆者と同じ寮の部屋にいる経済学部の一年生はカエルの解剖をしている。しかし、かといって専門学科は全て4年以降というわけでもなく、カエルの骨と一緒に「一般農業経済学入門」の教科書を持ち歩いているといった調子である。大学の授業は原則としてタイ語しか用いないが、学術用語はほとんど英語で、しかもそのタイ語にたいする割合が非常に高いようだ。



学 生 寮

外国語はいい高等学校では英語以外にフランス語またはドイツ語をほんの少しばかりだがとにかく教えるそうである。しかしカセツェート大学では英語一本槍である。一般的にいて、日本の学生にくらべて会話ができるようだが、読解力はあまりよくないようである。たとえば大学の1, 2年生用の英語の教科書は語いを1000語に限られたものである。出版物の少ないのは低開発国の常であるが、ここでもその例に洩れず、タイ語で書かれた大学の教科書、専門書は講義プリント以外はなく、洋書の高価なこととあいまって、この英語読書力の不足が大部分の学生達にとって大きな障害になっているように見受けられる。

学生達の日常生活は概して規則正しい。出席をとられるせいもあるが、さぼる学生はあまりない。また大部分の学生は経済的にあまり余裕がなく、平均400バーツ(約7~8千円)で1カ月を暮している。したがって、そういうわけでもないのだろうが、学生達のスポーツ、娯楽などはもっぱらキャンパス内が多いようだ。母校愛、上級生、下級生の折り目はかなり強く、学生自治会は政治活動を全然しない。大学内の秩序を守り、学生達のよりよい精神的、肉体的環境をつくりだすのに相当役立っている。たとえば、種々の学内行事を企画したり、出版を行ったり、売店を経営したり、ときには品行のよくない学生を懲罰の意味で川水路にほうりこんだりする。それだけに、学生達が町へ出掛けたりするときは服装もきちんとし、一般に

対する模範を示そうという気持が見られる。たとえば乗物の中で率先して席をゆずったり、酔っ払いを食堂からつまみだしたりというようなことをよく経験する。

このように学生々活は日本のにくらべ、色々な面で随分きちんとしたもので、少し窮屈気味なところもあるが、そのなかでも何といっても一番大きいのは落第、中退制度である。入学した学生の半数近くが5年間に落伍してしまう。上級生が尊敬を受けるのもあながち理由のないことではない。そして残った半数の精鋭達が晴れの学位授与式に臨み、ガウンをつけ四角の帽子をかぶって、国王陛下でずから学位記を拝受するということになる。

1942年カセツェート大学発足以来の卒業生総数は、男1,751名、女248名の合計2,009名にすぎない。このうちの95%が農務省を主とするタイ国政府官吏、3%が民間企業(主として外国会社のバンコク支店など)、残りの2%が自家の農場主となっている。

カセツェート大学がタイ国唯一の農科大学であることや、その卒業生の就職状況、大学の発展の経緯などから分るように、タイの農業を将来どうやっていくかという大問題が、まず大学の自治、学問の自由を云々する以前のものとして立ちはだかつており、その意味では種々の欠点は多々あっても、全体としては、その方向に向かってとにかく人材を送り出していると云えよう。

エール大学だより

酒井敏明

ペンシルヴァニア州ルイスバーグのバックネル大学で約2カ月の予備講習を受け、去年の9月はじめにニュー・ヘヴンに着きました。その後の4カ月間の見聞を簡単に記します。

ご承知のように、エール大学はハーヴァード大学とならんで、アメリカとしては早くから外国研究を精力的に進めて来た大学の一つで、伝統ある名門であることはいまでもありません。1841年にアメリカで最初

のサンスクリット語の教授が任命されたのはエールでありますし、その後主として言語、歴史、人類、地理の分野で、非西洋諸国の研究が進められて来ました。特に外国語教育の面では、外国人教師によるインテンシヴなオーラル・メソッドというべきエール・メソッドが確立され、第二次大戦によって急に大きな需要ができたためでしょうが、極東言語研究所(IFEL)が誕生しました。東および南アジア言語文学、スラヴ言

語文学、言語学の3学科も戦後にできたようです。現在 International Studies としては、African Studies, East Asian Studies, Latin American Studies, Russian and East European Studies, Southeast Asian Studies の5つのプログラムがあります。

Southeast Asia Studies は1947年アメリカでは最初に設立されました。Raymond Kennedy, John F. Embree などの人類学の大きな業績が重きをなしていたのですが、その後着実に発展し、1959年以來言語および地域センターとして、政府の補助金も大変多いようです。現在、評議員会議長は Karl J. Pelzer 氏、副議長は Harry J. Benda 氏、教授は言語学、人類学などの兼任ですが8人、準教授から講師までが9人というスタッフです。今年度開講されているコースは10、プログラム独自のものは少なく、多くは他の学科との共通講義です。言語はインドネシア語、タガログ語、ビルマ語、タイ語、ヴェトナム語の5つ（マラヨポリネシア語は休講）が教育されています。

Southeast Asia Studies は修士課程をもち、discipline を4コース、area を2コース、言語を上級まで履習した学生がM.A.を与えられます。言語は初級、中級、上級の3コースに分かれていますから、入学前の夏期休暇中に IFEL で開かれる2カ月の集中講習に参加して、初級を終えておかないと、2年で修了することはできません。Ph. D. は地理学、政治学などの学科に籍を置き、その学科で取得するという形です。今年は修士課程12人、Ph. D. candidates は7人、他に私もその1人である special students が3人います。

今年のコースを次に記します。

- Karl J. Pelzer, Geography of Southeast Asia.
Harold C. Conklin, Language, Culture and Society in the Philippines.
David N. Rowe, Problems in the International Relations of East Asia, Southeast Asia, and the Pacific.
Paul Mus, Brahmanism and Buddhism—The Background of Indian Thought.
Harry J. Benda, The History of Southeast Asia since 1500.

Harry J. Benda, Problems in the History of Modern Southeast Asia.

Nelson I. Wu, The Art of Eastern and Southern Asia.

David N. Rowe, The Governments and Politics of East, Southeast and South Asia.

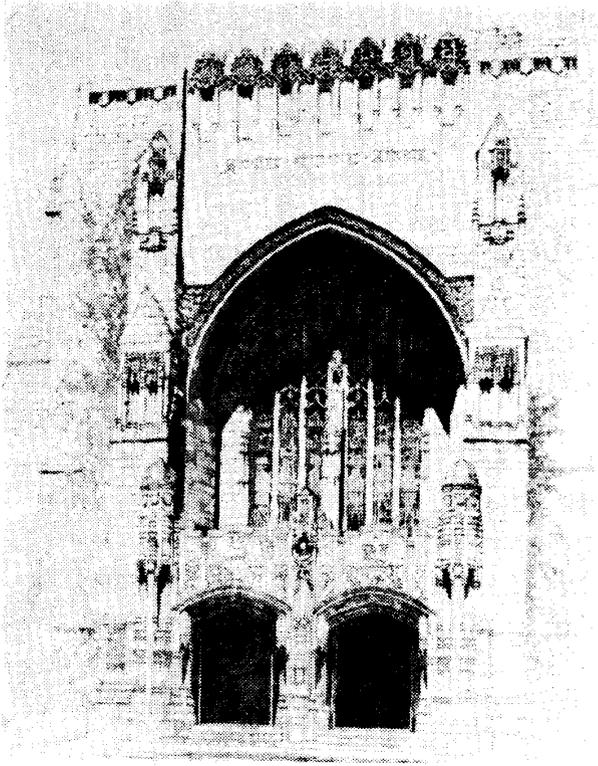
Leopold J. Pospisil, Ethnology of Papua and Australia.

Jacques Barrau, Man and Plants in Tropical Oceania.

はじめの4つは前期で終了、最後の2つは後期から、残りは通年の講義です。

このうち私がとっているのは Pelzer 氏の地理だけで、他の講義の内容をお伝えすることはできません。Benda 氏の歴史は学生間になかなか人気があるようです。Pelzer 氏のクラスは受講生12人ほど、他の講義と同じく、Southeast Asia Studies または地理以外を専攻する学生も受講しています。東南アジアの自然、文化、経済、政治の概念を与えるのが目的で、去年出版された Charles A. Fisher の Southeast Asia を教科書に指定し、他に、地形、気候、土壌、植生、民族などの主題ごとに、いわゆる reading assignment がたくさん指定されます。毎週月曜日の午後2時間 Pelzer 氏が各主題ごとに講義するのですが、一定時間内に多くの内容を語らねばならぬからですが、ほとんど休む暇なしに語り続けるという調子です。特に後半、農業を主とする経済生活を述べる段になると、戦前フィリピンと蘭印の農業開拓を実地調査した経験があり、多年の蓄積がある氏の専門分野でありますから、講義にますます熱が入り、うまずたゆまず語り続けるという趣きがありました。それでいて、学生の比較的つまらない質問に対しても、懇切に答えるという態度があり、限られた時間数ではありますがなかなか充実した内容があったと思います。他の講義もみな週2時間または3時間であり、指定参考書や論文が多いこと、学期末に試験があり、レポートを提出させることなど、共通しているようです。

言語教育については、先にあげた5つの言語、それぞれ初級は週9時間、中級6時間、上級3時間の時間数が割り当てられ、外国人教師が教えています。私はビルマ語初級を選択していますが、先生2人に学生1人という変わったクラスです。Cornyn 氏の Spoken



エール大学スターリング記念図書館

Burmese の改訂版として準備中の Beginning Burmese を教科書とし、主として文法的事項については言語学者の D. Haigh Roop 氏が、発音をビルマ婦人の Daw Tin Tin さんが分担して教えます。毎朝2時間ずつ（金曜日は1時間、土曜、日曜は休み）、日本人には発音しにくい音が多いビルマ語会話を先生2人を相手にやりますと、正直な話非常に疲れます。それでも先生の方が熱心なのに唯一人の学生である私が怠けるわけにはゆかず、比較的熱心に勉強しているといつてよいでしょう。今年ビルマ語を習っているのは中級、上級にはいないので、私1人です。修士課程の12人は、タイ語4人、インドネシア語3人、タガログ語3人、ヴェトナム語2人に分かれています。

私はこの他に、地理学科の気候学と、学部学生的一般教養にあたる地質学序論を選択していますので、4科目で週18時間になり、大学院学生の平均は週8～12時間ですから、かなり負担過剰の傾向があります。

エール大学の図書館 Sterling Memorial Library は蔵書400万冊以上、アメリカ第6位の大図書館です。東南アジア関係では特にビルマとインドネシアの

文献が豊富だといわれ、ビルマ語、タイ語の本が数千冊はあるそうです。中国語、日本語の東南アジア関係の文献は、戦前のものが比較的揃っているようで、一部は文献目録として HRAF から出版されていることはご承知の通りです。また図書館に Asian Reading Room と呼ぶ、中国語、日本語を中心とするアジア諸国語の図書を専門におさめた部屋があり、Siam Rath (バンコク)、The Guardian (ラングーン)、Saigon Daily News (サイゴン)、Straits Times (シンガポール)、Indonesian Observer (ジャカルタ)などの、英語、現地語、中国語の新聞や、幾つかの雑誌が読めるようになっています。ただし、1カ月から4カ月近くおくれて到着しているのは、仕方がないことでしょう。

また、同じく図書館の中の一室に Human Relations Area Files が置かれています。HRAF の本部は大学の中心からは3キロほど離れたところに移転しました。20人ほどのスタッフの中には去年の2月に京都大学に来た Dorothy Murphy さんもいて、毎日仕事をしています。

IFEL では中国語、日本語などの授業がおこなわれていますが、中国語のクラスには15人ほどの学生の他に、軍の委託学生でしょうか若い制服の軍人が100人以上いるそうです。地理学科の建物にはやはりその関係の事務室が同居しています。こうした点はわれわれにはきわめて奇異に感じられますが、アメリカとしては当然のことなのかも知れません。全学共同利用の Language Laboratory には各国語のテープが用意されていて、150人くらいがそれぞれフランス語、スペイン語など自分の希望のテープを別々に聞くことができるようになっています。私もたまにビルマ語の発音の練習に利用しています。

Peabody Museum には恐龍の骨格やアメリカ・インディアン関係の収集品の他、東南アジア関係の民俗資料が展示されており、新しいものとして Pospisil 氏の西イリアン Kapauk Papuan のものもあるようです。美術館や稀覯本図書館をはじめ、これだけ立派な博物館を持つなど、羨ましい限りです。

Southeast Asia Studies では月に1回くらいのわりで公開講演会を開いています。去年の10月から12月までの間に、インドネシアの国連大使 L.N. Palar 氏の「インドネシアとマレーシアの対決」、フィリピン

大学学長 Carlos P. Romulo 氏の「フィリピンと東南アジア」、マレーシアの国連大使 Radhakrishna Ramani 氏の「話題の焦点マレーシア」、前ホワイトハウス補佐官 E.G. Lansdale 氏の「南ヴェトナムにおけるアメリカの役割」、キャンベラのオーストラリア国立大学 A.H. Johns 氏の「現代インドネシア文学の諸相」が講演されました。はじめの4回は政治学科との共催、最後のは東および南アジア言語文学学科との共催です。後の2回は都合がつかず聞きませんでした。聴講者は教授、学生を中心に150人~200人、最初 Pelzer 氏が紹介し(ついでながら Pelzer 氏は3人の講師とは旧知の間柄、いずれも戦前にそれぞれの国で会っているそうです)、1時間半ほど講演がおこなれた後、質疑応答がありました。現在の政治の焦点が論題であれば関心が強いのは当然で、第1回、第3回ともなかなか鋭い質問が寄せられました。Palar 氏、Ramani 氏いずれの場合もまことに熱弁をふるっていましたが、さすがに外交官らしく、肝心要めの問題は語るのを避けていたように思われるのは、若干

物足りない感じを与えました。

こうした講演会でも感じるのですが、講師にしても聴講者にしても各国の人がいて、大学というものはヨーロッパでもアメリカでも著しく国際的であることを特徴とするとは、よくいわれます。学生にしても、エールには外国人学生が627人いて、対全学生数の比率は7.5%であると、去年の統計に見えています。大学院だけを考えれば、比率がさらに高まることはいうまでもありません。私が住む大学院の寮 Hall of Graduate Studie にも、ヨーロッパ、中南米諸国はもちろん、インドやアフリカからの学生がたくさんいます。もっとも、International Studies を専攻する外国人学生はきわめて少ないようです。

図書館には読みたい本が多いし、講義も興味深いものがあるのですが、今もって言葉が自由に操れないうらみがあり、現在選択しているコースの準備だけで手いっぱいというのが実情です。残念ですが仕方ありません。それでもあと半年なんとか努力を続けたいと思っています。

